資料２

持続可能な地域づくりに社会教育が果たす役割―地域人材の育成を視点として―
提言書の骨子案・構成案（たたき台）

令和 5 年 5 月 12 日
松本　大

ポイント

■　2 つのグループについて、次の 3 つの大きな柱を共通して立てた

I.　**ネットワークへの支援**（人材育成に関わる「プラットホーム」の形成）

II.　**人への支援**（「人材育成に関わる人材」の育成）

III.　**活動への支援**

- 文化グループ：「活動の魅力化」とその「発表」の「循環」の形成
- 子育てグループ：参加者の多様性と参加しやすさの促進

■　つまり

中項目：「ネットワーク」「人」「活動」（「活動」のみグループで大項目のテーマが異なる）

小項目：各グループでそれぞれ作成

中項目Ⅰ：ネットワークへの支援（人材育成に関わる「プラットホーム」の形成）

概要

■　地域人材の育成のためには、仙台市における施設や機関が、人や情報が集まりつながり広がる「プラットホーム」としての役割を果たすことが重要である。

■　本提言では、「プラットホーム」を次の 2 つの観点から重視している。

①　市全体で人材育成のプラットホームを構築

- もともと市民センターには、人々が「つどう」「まなぶ」「むすぶ」機能があり、そこで人々が「つどう」「まなぶ」「むすぶ」ことが「人づくり」「地域づくり」につながってきたとされている。
- 今後、地域人材を育成するためには、市民センターだけが人々が「つどう」「まなぶ」「むすぶ」機能のある「プラットホーム」としての役割を果たすのではなく、市内の多様な関連施設・機関・団体のそれぞれも「プラットホーム」としての役割も果たし、さらにそれぞれがつながっていくことで、市全体で有機的に地域人材の育成を推進することが求められる。

② 「リアル」と「デジタル」の両面でプラットホームをつくる

- 令和 4 年 8 月に公表された第 11 期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理『全ての人のウェルビーイングを実現する、共に学び支えあう生涯学習・社会教育に向けて』においても、学習活動のデジタル化・オンライン化が進んでおり、デジタル技術の活用が今後の生涯学習・社会教育に大きな変化をもたらす可能性があることが指摘されている。
- 「リアル」なネットワークだけではなく、「デジタル」なネットワークを形成することは、地域人材の育成に関する市民のニーズを満たし課題を解決するうえで有効である。
- また、「リアル」と「デジタル」の両面でプラットホームを形成することができれば、地域差を解消することにつながるといえる。

小項目

文化グループ

(1)「リアル」なネットワークの形成

① 施設間の連携（市民センター、学校、児童館など）（例：荒町）

② 団体との連携（社会学級、PTA など関連）（例：愛子）

③ 市民が身近で相談しやすい環境づくり

- ノウハウ
- 助成金

④ 情報交換や出会いの場の形成

(2)「デジタル」なネットワークの形成

① 団体のデータベース化やアーカイブ化

② 情報の収集・共有・発信・活用

子育てグループ

(1) プラットホームになる「場」の形成

① 情報を共有したり、地域の人材や団体を「知る機会」の創出（岩切）

② 市民が地域のなかでお互いに「知り合い交流する機会」の創出（岩切）

③ この「場」をとおした「お互いさまの意識」の形成

④ 市民センターの機能の周知

(2)「リアル」なネットワークの形成

① 施設間の連携（市民センター、学校、児童館など）

② 団体との連携（例：岩切）

③ 学校・家庭・地域の連携（例：生出）

④　行政の各部署の連携の必要性（例：子ども劇場）

(3)「デジタル」なネットワークの形成

①　団体のデータベース化

中項目Ⅱ：人への支援（**「人材育成に関わる人材」の育成**）

概要

■　地域の人材育成が「持続可能」なものになるためには、「次の人材」が次々と育成され活躍していくことが必要である。

■　地域づくりにおいては、リーダーシップで重要なのは「次の人材を育てる人材」を育てることとされ、このようなリーダーシップは「スノーフレーク（雪の結晶）リーダーシップ」と呼ばれている。つまり人材育成においては、次の人材を育成し、今度はその育成された人がさらに次の人材を育成することで、人材が「雪の結晶」のように広がっていくことが重要といえる。

■　今回の調査からは、まさにそのように「地域人材の育成」そのものに関わっている人材を育成すること、つまり「人材育成に関わる人材」の育成の重要性を指摘できる。

小項目

文化グループ

(1)「教える人」の育成（例：荒町）

①　子どもに関わる専門性の形成

②　市民センターの講座など、市民の学習の場で活躍できる人材の育成

(2)「主体的に関わる人を育成できる人」の育成（例：愛子、ReRoots）

①　普段の社会教育における活動や学習のなかで人びとは成長するという視点が重要

②　そのためには熟議のファシリテーターの育成が重要

(3) ネットワークを「つくったり」「活用できる」人材の育成

①　リアル

②　デジタル

(4) 社会教育関係職員の力量形成

①　社会教育施設や社会教育関係職員には、「人材育成に関わる人材」の育成や支援をするこ

とが求められる。

子育てグループ

（1）コーディネーターの育成

① 世代や所属を越えた「つながり」の形成が求められる

（2）活動の中心となるキーパーソンの育成

① 「チャレンジ精神をもつ人」「何かやりたい人」を育成し支える仕組みづくり

② ボランティアスタッフの育成（例：子ども劇場）

（3）話し合いによる人材育成

① 委員だけではなく多くの人びとが話し合いをとおして、学びあう（例：生出）

（4）社会教育関係職員の力量形成

① 社会教育施設や社会教育関係職員には、「人材育成に関わる人材」の育成や支援をすることが求められる。

② 「伴走者」

中項目Ⅲ：活動への支援

文化グループ：中項目テーマ　「活動の魅力化」とその「発表」の「循環」をつくる

概要

■ 活動の成果を発表することは、活動する人びとのやりがいや生きがいにつながったり、市民への情報発信に役立ったりするなど、団体や活動を維持・発展していくうえで大きな役割を持っている。しかしコロナ禍では、対面による活動の発表の場を設けることが困難であった。

■ 他方で、発表の場があることだけでは十分ではない。活動の魅力をたえず高めることが、持続可能な活動につながっていく。そのように活動の魅力を高めるためには、関係する人びとが学びをとおして活動に関する価値や資源を発見したり磨き上げていくことが必要である。このときの学びを支援することが社会教育の施設や職員に求められる。

■ 学びをもとに「活動の魅力化」を進め、それを「発表」し、さらに学びをとおして「活動の魅力化」を進めていくという、「活動の魅力化」と「発表」の「循環」が重要である。

小項目

（1）「発表の場」の創出・増加をとおした活動の維持・発展

（2）「活動の魅力化」の推進

① 「発表の場」だけでは活動は発展しない

② 活動の価値を発見し高める「学び」が重要

（3）活動場所となる施設の使いやすさの促進

子育てグループ：中項目テーマ　参加者の多様性と参加しやすさの促進

概要

■ 少子化が進み、共働き世帯が主流になるなかで、地域において自主的に子育てや学校に関わる人々が減少してきている。また、それぞれの家庭や仕事をめぐる状況も多様化してきており、より多くの人びとが参加できる仕組みをつくることが必要になってきている。

■ また近年は「誰一人取り残さない」ということが教育政策のキーワードになっている。第 11 期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理においても、誰 1 人として取り残すことなく学習機会を提供することが強調されており、地域の人材育成のためには、より多様な参加者がより参加しやすくなるための支援が求められる。

小項目

（1）参加のハードルを下げる工夫

① 活動する人びとが楽しむことで、イベントに参加しやすい雰囲気づくり（例：生出）

（2）多様な属性の人々が参加できるための工夫

① 自身の年齢や所属、保護者の就労の有無、子どもの年齢に関わらず気軽に参加できるための支援（例：きしゃぽっぽ）